

# 高等学校における習熟度別学習指導の 実態と成果の概観 I

杉 江 修 治

## はじめに

1978年改訂の高等学校学習指導要領に「習熟の程度などに応じて弾力的な学級の編成を工夫するなど」という記述がなされて以来、習熟度別学習指導に対する関心は高くなった。天野他の調査(1986)によれば、何らかの形態で習熟度別学級編成を行っている普通科高校は1984年度で45.4%であった。しかも、その形態の導入を昭和50年代以降に行った学校が約6割を占めるといふ資料も報告されている。

従来の実証的研究では、能力別のグルーピング(習熟度別学習指導も含めて)の効果は一貫していない(杉江・宇田 1989)。また、さまざまな教育上の問題点も指摘されている。それにも関わらず多くの実践化が行われてきている。もちろん、実証的資料も、教育に関わる応用に際しては、教師の指導観に応じて適用されるべきものであるから、たとえ、効果がないという結論が示されても、実証的資料のみを根拠に、ある方法を否定するということは正しくない。しかし、従来研究成果を踏まえて、現実の実践を吟味し、改善点を見つけだし、時には根本的な問題に関わる議論をすることも必要であろう。理論と実践を結ぶ、アクション・リサーチが、特にわが国の習熟度別学習指導研究に関しては行われてこなかった。教育の捉え方は、文化によって様相の異なる部分がある。諸外国の資料のみではわが国の実践を検討するには不十分である。

この論文では、高校の実際の習熟度別学習指導実践の資料に数多くあたり、それぞれの事例の中での習熟度別学習指導のねらい、指導の内容、効果、残された課題を紹介、検討する。その様な現実の資料を踏まえて、実証的先行諸研究と関連させた、今後の研究上、実践上の課題の明確化を試

みたい。

ここでとり上げる実践は、愛知県内の高校の学校研究紀要からとり出したものである。県によって習熟度別学習指導を実施している学校の割合が異なることは、天野他の研究(1986)でも示されている。愛知県は、58.0%で、全国ではやや実施率が高い方に属するが、数値の上では特に目立つ県ではない。ただし、県教育委員会の指導内容等で、県としての習熟度別学習指導の特徴はあるかもしれないことは断っておきたい。

論文中の用語は、理解にさしつかえのない限り、それぞれの実践研究での用語を用いた。表現も理解のための補足は行ったが、論文中のものを生かすことにつとめた。ただし、データの読みとりに関しては、それぞれの報告とは独立に筆者が行った。また、習熟度別グルーピングの形態について、セッティング、バンディングといった表現で分類をしているが、その意味は、天野他(1986)によっている。

セッティング：特定の教科について、その教科の能力に基づいて、生徒をいくつかの集団(授業時の学級)に分化すること。ホームルーム編成とは別である。

バンディング：生徒を「平均以上」「平均」「平均以下」等の、幅広い能力集団(ability band)に分化すること。

なお、進路に見合った形のコース設定(文科系、理科系等)については、カリキュラム・グルーピングという表現を使った。

## A 愛知高校(伊佐治 1984)

### 1 研究目的

この高校では、論文発表時点より10数年前、上・中・下3コースの学力別授業(バンディング)を実施し、下位クラスの沈滞化と、実務面の煩雑化というマイナスの結果を経験している。今回はその反省に立った実践を試みている。

入学者の英語学力の個人差は非常に大きいという実状が示され、高校1年生こそがそれを矯正できる時期であるという認識から、そこに習熟度別学習指導を導入する。

## 2 研究のデザイン

1年生、英語I、週6時間の内、4時間は通常の学級で授業し、2時間を習熟度別学習指導にあてる(セッティング)。なお、1年生の標準単位は4時間であり、英語の授業時間は2時間多い形のカリキュラムになっている。1982年度及び1983年度、それぞれの実践について、考査による学業成績と生徒へのアンケートを資料として検討した。

## 3 指導過程

### (1) 習熟度別グループ編成の仕方

習熟度は標準コース(Aコース)と、基礎コース(Bコース)の2段階に分ける。Bコースは少人数クラスとする。

1982年度は、1年生12クラスを4ブロックに分け、単位となる3クラスをAコース2クラス(各46人)、Bコース2クラス(各25人)に分ける。各ブロック1学級増となる。1983年度は2クラスをAコース1クラス(45人)、Bコース2クラス(各25人)に分けた。ここでのBコースはもとのホームルームの成員で構成している。

編成替えは両年度共に2学期中間考査後に1度、それまでのテストの結果に基づき行なう。

### (2) 習熟度別学習指導の過程

記述は少なく、Bコースの方が若干内容が少ないということが認められるにとどまる(両年度共)。なお、教材は1983年度に変更し、工夫を加えている。グルーピング以外の指導上の工夫については特には記述はない。

## 4 効果の検討

### (1) 生徒への質問紙調査結果

1982年度は、11月に111名を対象に調査を行った。その結果、習熟度別学習指導への評価は「よい」(29%)、「どちらでもない」(48%)、「悪い」(23%)であった。良い理由は、「能力にあった勉強ができる」(38名)が主なものであり、悪い理由は、「能力にあっていない」(5名)、「差別される様で嫌い」(3名)等が複数回答としてあった。2月にBコースの者のみに同様の質問をしたところ、89.7%が肯定的な回答をした。

1983年度は、9月にAコース70名、Bコース89名に対して実施した。Aコースの場合は「よい」(30%)、「どちらでもない」(49%)、「悪い」(21%)、

Bコースの場合は、「よい」(37%),「どちらでもない」(43%),「悪い」(20%)という結果であり、2年度間、および、コース間の差は大きいものではなかった。評価は生徒によってさまざまに分かれたということができよう。

## (2) 学業成績の変化

1982年の場合、定期考査の結果がコース毎に示されたが、用いられた問題が明示されてなく、点数だけではその達成度は検討できない。ただ、一貫して、Aコースの生徒がBコースよりも点数が高く、3学期になって両者の差は、著しく開くことも縮むこともなかった。1983年度については、資料は示されていない。

## 5 今後の課題

習熟度別学習指導は下位グループが少人数であったことに指導上のメリットがあったという言及がなされている。しかし、下位クラスの学習意欲は低調のままであった。また、教材も、基礎的な演習の多く入ったものを工夫する必要が指摘された。

こういった問題の解決に向けて、「教材の改善」、「習熟度別クラスのクラス作り」が具体的な課題として掲げられた。なお、2年生になって習熟度別授業を導入することに対しては、1年生で習熟度別学習指導を担当した教師集団は否定的な意見を持ったと報告がある。その理由は、煩雑さ、さらに、上位者を欠くクラスでの指導は難しいというところにあった。

## B 知多東高校(滝上他 1984)

### 1 研究目的

入学時の学力差がすでに大きく、同一クラスでは(指導上の)対応ができかねることから習熟度別学級編成を実施した。1年間の実践をもとに、次年度の対応の資料を得たい。

### 2 研究のデザイン

1年生の数学科で実施する。後に述べる様に、グルーピングの形は、バンディングとセッティングを組み合わせている。1年間の実践に関して、生徒へのアンケートと3回のテストのデータを分析し、考察する。

### 3 指導過程

#### (1) 習熟度別グループ編成の仕方

3水準(基礎, 基礎・演習, 応用)のグルーピングを行なう。応用コース2クラスは選抜クラスであり, ホームルームの単位でもある。残り6クラスの生徒が, 数学科の授業の際に, 基礎(下位)及び基礎・演習(上位)のコースに分けられた。いずれのコースに入るかは, オリエンテーション・テストの結果と生徒の希望で決めた。上位, 下位のコースのクラス人数差はない。セッティングとバンディングが組み合わされている。応用コースの基準は明確な言及がない(「数学だけで分けられていない」という記述はある)。

基礎と基礎・演習のクラス替えを1学期末に試みたが, 希望者がなく, 実質的にはそれは行われなかった。

#### (2) 習熟度別学習指導の過程

基礎コースは, 教科書中心で進めた。

基礎・演習コースは, 教科書と問題集を用いた。

応用コースは, 演習を中心とした。

考査は, 応用コースのみ別問題で行った。

### 4 効果の検討

#### (1) 生徒への質問紙調査結果

質問紙調査の結果の主なものについて, 表1にまとめた。総じて, 理解度, 満足度共に, 基礎コースが他のコースよりポジティブな結果を示している。理解度の性差の検討では, 選抜クラス(応用コース)の女子に「わからない」とする者の割合が大きいという結果も見られた。

#### (2) 学業成績の変化

表1 習熟度別学習指導に対する生徒の感想

(知多東高校 1984)

項 目	選 択 肢	習 熟 度 コ ー ス		
		基 礎	基礎・演習	応 用
理 解 度	よ く わ か る	9.3	7.5	6.6
	ふ つ う	68.2	50.7	57.8
	あまりわからない	22.5	41.8	35.6
習熟度別クラス編成について	よ か っ た	55.2	12.2	29.5
	?	37.8	73.8	52.4
	よ く な い	6.9	14.0	18.0

(%)

学業成績は4月、9月、11月に実施したテストの相関関係を検討するという形で資料が示されている。

基礎コースでは、各々のテスト間の相関が他のコースに比べて、低い。

基礎・演習コースでは、そこでの下位の生徒が、基礎コースのレベルに入りこんでいるケースもあり、伸び悩みの事例が見られる。また、そのコースの上位者は、応用コースには追いついていない。

応用コースでは、成績の相関は一貫して高い。上位の伸びは大きいですが、女子を中心とした、下位の者が下降傾向を示している。

## 5 今後の課題

論文では、3点の問題点があげられている。

- ・各コースの達成目標の明確化(の必要性)。
- ・定期考査の問題内容を共通化するかどうか。
- ・クラス分けの資料としてのオリエンテーション・テストの適否。

また、考察の中で、ボーダーラインの生徒の理解度、満足度の問題が指摘されており、クラス分けの水準の設定の仕方もここでは問題になり得るのではないかと考えられる。

## C 知多東高校(古池他 1985)

### 1 研究目的

この高校で実施しているバンディング・タイプの数学科習熟度別学習指導の形態に応じた教材の整理を行ない、教師間で共通理解が図れる様にする。さらに、妥当な評価の方法を工夫する。

### 2 研究のデザイン

1, 2年生, 数学科の各習熟度別の到達目標を, 公式と問題のパターン毎に例題をあげて, 1つの表にまとめる。

評価のシステムを学年毎に検討する。

### 3 指導過程

#### (1) 習熟度別グループ編成の仕方

1年生は10クラスから上位, 下位, 各2クラス, 中位5クラスの編成をした(記述はないが, 前年度の論文から推測すると, 中位クラスではセッティングをしている可能性がある)。2年生も1年生時には同様のグルー

ピングの経験をしている。

2年生では、カリキュラム・グルーピングが導入された。それは、A（私立文科系・専門学校・就職）、B（私立理科系・国公立文科系）、C（国公立理科系）の3類型である。この内、C型でも3水準の習熟度別クラス編成を行った。

## （2）習熟度別学習指導の過程

使用教科書は、類型によって異なる。副教材は、習熟度別クラスや、類型によって異なる。また、指導内容、時間配分、時間数は習熟度別クラス、類型で異なる。テストの内容は、1年生は共通問題であるが、2年生は類型によって異なる。それぞれの具体的計画は論文中に表が付されている。

夏休み、冬休み、さらに、2、3学期には早朝補習が組まれた。

また、補充として、1年生2学期に、低到達度の生徒を対象に、基礎計算力テストを合格の水準（7割）に至るまで繰り返し実施した。

## （3）習熟度別到達目標

この研究の最大のねらいである習熟度別到達目標については、2単元分の一覧表が例示された。

## 4 効果の検討

ここでは、学習の成果についての検討は行わなかった。

## 5 今後の課題

この論文で示された、習熟度、類型に応じた到達目標の整理という試みは注目すべきだろう。この領域の研究が継続的に展開されることは望ましいと考えられる。ただし、妥当な評価のシステムづくりの方では課題が残った。また、1年生では、指導方法も含めた大幅な見直しの必要性が指摘されている。

なお、基礎計算力テストは、一定の成果を収めながらも、問題も多く残った。即ち、生徒のとり組み意欲が高まらなかったこと、中盤まで人数が多く、効果が上がりにくかったこと等が指摘された。

## D 東浦高校（飯田他 1982）

### 1 研究目的

ここでは、1978年から、セッティングによる習熟度別学習指導を行って

きた。その後、教員の委員会形式の検討を経、1980年に至り、バンディングを基本に、数学科と英語科ではセッティングも組み合わせた方式に変えた。ただ、この方式導入のねらいについては記述がない。論文からの全体的な印象では、受験対策的な色合いの強いものの様に感じられる。

## 2 研究のデザイン

1年間の、数学科、英語科の習熟度別学習指導の実践を、生徒へのアンケート、テスト成績で検討する。

## 3 指導過程

### (1) 習熟度別グループ編成の仕方

1年生は、8クラス中2クラスを固定、残り6クラスは数学科と英語科で3水準のセッティングを行なう。2年生は、1クラスを固定、他の7クラスは文科系6、理科系1の類型別編成を行なう。3年生は、文科系7、理科系1の類型別編成がなされ、文科系の内1クラスを固定、また、その固定クラスと理科系クラス、合わせて2クラスで数学のみ3水準のセッティングを行なう。

固定クラスの意味についての明記はないが、学力上位の選抜クラスの意味を持つものと思われる。その編成は、入学時の学業成績(中学校調査書、学力検査、オリエンテーション・テスト)と進路希望、中学校の推薦等を参考にした。進級時に編成替えを行なう。

セッティングの基準は、オリエンテーション・テスト、定期考査、等の成績と、各教科担任の意見、および、ボーダーライン上の生徒は事前に調査した希望を考慮する。人数は30人前後ずつであった。編成替えは、数学科は学期毎、英語科は9月に一度行った。

なお、習熟度別クラス編成については、オリエンテーション、入学式等で生徒、父兄に趣旨の説明を行い、理解を深めることに留意している。

### (2) 習熟度別学習指導の過程

上位選抜クラスと普通クラスとの指導内容、指導過程の違いについては言及がない。

数学科のセッティングでは、1年生は、6単位中3単位をそれにあてている。教材は、上位は応用・発展的なもの、下位は基礎的なもの、中位はその中間的なものを用いる。3年生については言及がない。



英語科のセッティングでは、文法の2単位をそれにあてた。教科書は、各水準で同一のものを用いた。ただし、下位のクラスでは、基礎、復習、暗唱に力を入れた指導を行った。

早朝補習は、出席を義務づけて行なう。ただし、論文からは、上位の選抜クラスのみを実施している様に推測される。

#### 4 効果の検討

##### (1) 生徒への質問紙調査結果

12月に、1、2年生の選抜クラスと普通クラスの生徒に質問紙による調査を実施した。その内容は、学習実態に関するものが多い。習熟度別学習指導に関する項目は、その結果の主なものを表2に示した。

表2 習熟度別学習指導に対する生徒の感想

(東浦高校 1982)

項 目	選 択 肢	1 年 生		2 年 生	
		上位クラス	普通クラス	上位クラス	普通クラス
授業の内容を理解しやすい	は い	14	32	23	37
	い い え	86	67	77	64
授業中の雰囲気がよく、意欲がわく	は い	36	25	20	16
	い い え	64	75	80	84

(%)

理解度については、1、2年生共に上位選抜クラスで低い傾向が見られる。一方、学習の意欲づけについては、1、2年生共にやや上位選抜クラスが望ましい様に思われるが、もともとの学習意欲がすでに異なっている可能性もあり、クラスそのもののみによって引き起こされたとは判断できない。なお、1学期に比べて学習意欲が増したかという項目もあったが、「大変向上」は、上位選抜クラスでは1年生で5.8%、2年生で13.5%あった(普通クラスは、1年生は2.9%、2年生は0.0%)が、「全くやる気喪失」も1年生で10.6%、2年生で6.7%(普通クラスでは1年生で7.7%、2年生で18.3%)みられた。

セッティングでは、英語科で調査を行っている。全体で、「積極的賛成」は38%、「消極的賛成」は29%、「反対」は33%であった。反対理由に被差別感をあげた者は、全体で33%、下位クラスでは11.8%と、むしろ少ない結果であった。

##### (2) 学業成績の変化

成績は上位選抜クラスと、普通クラスの比較が可能な、オリエンテーション・テスト、実力考査、進研模試の結果で検討した。数値によるデータの示し方をしていないので的確な検討は困難であるが、分布の変化を見ると、1、2年生共に上位者を上位選抜クラスの者が占める割合が次第に増加して行く様子がうかがえる。即ち、普通クラスとの間に階層差が生じてくる傾向がうかがえるのである。一方、上位選抜クラスでは、少数の成績下降者も見られる。成績の標準偏差を検討したデータでは、普通クラスに比べ、次第にその値が大きくなる傾向を認めることができる。

セッティングの効果は、英語科で触れられている。即ち、下位クラスの伸びが大きく、上位、中位では伸びが特に大きくはなかったと報告されている(数値では示されていない)。

## 5 今後の課題

質問紙の結果からは、習熟度に合った指導(理解の促進)の工夫、授業中の雰囲気作りの必要性が指摘されている。その他、特に問題点の検討はなされていない。

## E 東浦高校(飯田他 1984)

### 1 研究目的

生徒の家庭、学校における学習実態を明らかにするためのアンケート調査の実施。

### 2 研究のデザイン

1981年の調査と、1983年の調査とを比較検討する。調査項目は同一。対象は、1、2、3年生。上位選抜クラスと、普通クラスの比較も行なう。この研究の目的にはされていないが、このデザインから、先の年度の実践を踏まえて、どれほどの指導改善が行われうるものか、即ち、生徒の反応を通して、教師の対応を評価することができると考えられるのである。

### 3 指導過程

指導過程の言及はない。前の論文の記述が基本になっていることが推測される。

### 4 結果

項目は多数にのぼるが、習熟度別学習指導に関連したところのみをとり

表3 習熟度別学習指導に対する生徒の感想 その2

（東浦高校 1984）

項 目	選 択 肢	1 年 生		2 年 生	
		上位クラス	普通クラス	上位クラス	普通クラス
授業の内容を理解 しやすい	は い	41	28	34	27
	い い え	59	72	66	71
授業中の雰囲気 がよく、意欲がわく	は い	34	24	46	18
	い い え	64	76	52	81

（％）

出してみる（表3参照）。これによれば、上位選抜クラスでの理解度が1，2年生で、1981年度調査（表2参照）に比べて大幅に上昇していることが分かる。また、意欲づけの側面では特に2年生で上昇している結果が見られる。これらは、指導の改善が見られたことを強く示唆する結果と考えられよう。ただし、普通クラスではその様な結果はみられない。

## 5 今後の課題

習熟度別学習指導に関わる事柄については、特に言及はされなかった。

## F 東山工業高校（豊田 1981）

### 1 研究目的

習熟度別学習指導を、1つの「試み」としてとり組み、1年間の実践の経過と、その成果ならびに問題点を明らかにしようとするものである。

習熟度別学習指導の目的は、あくまでCランクに入る低学力生徒の学力補充、増進に最重点を置く。

### 2 研究のデザイン

1学年9クラスの内、4クラスに、数学科でセッティングによる習熟度別学習指導を通年で実施した。

### 3 指導過程

#### （1）習熟度別グループ編成の仕方

2クラスを上位クラス2つと、下位クラス1つの、合わせて3つに分けた。人数は各クラス均等。1学期は数学の学力検査成績と中学校からの調査書評定に基づき決定した。

クラスの編成替えは定期考査毎に行った。編成の基準は考査の成績とな

るが、点数のみで一概に線引きをせず、一人一人を見ながら決定していった。従って明確な基準は示すことができない。

なお、1度でも下位クラスを経験したことのある者は50.9%あった。一貫して下位クラスの者は全体で1名(0.6%)、5分の4の期間下位クラスに所属した者は5.0%であった。即ち固定的なクラス編成は合理的ではないという資料が示されたといえるのである。

## (2) 習熟度別学習指導の過程

各ランクのクラスに対し、授業内容で格差を設けない。即ち、同一教科書を使用し、同一内容、同一進度で授業を進め、定期考査は全クラス同一問題で実施する。ただし、下位クラスの生徒に対しては、不十分な部分の習熟を図るため、問題練習を数多くこなすことを中心に授業を進め、教師対生徒のマンツーマンの指導に心がけた。グルーピング以外での指導の工夫については特に言及はない。

## 4 効果の検討

年度末に、習熟度別学習指導を実施したクラス、実施しなかったクラスに対して生徒の意見調査を行った。実施しなかったクラスでは、「習熟度別授業をしてほしいか」に対して、「はい」(13%)、「どちらでもない」(42%)、「いいえ」(45%)という回答が得られた。実施したクラスの、下位ランクの経験者は、「少人数クラスでの勉強はプラスになったか」に対して、「はい」(55%)、「どちらでもない」(25%)、「いいえ」(20%)、「少人数クラスを設けることはどうか」に対しては、「よい」(43%)、「どちらでもない」(33%)、「わるい」(24%)と回答した。下位ランクの経験のない者は、習熟度別授業を「よい」(26%)、「どちらでもない」(53%)、「わるい」(21%)と評価している。下位クラスの経験は、習熟度別学習指導への評価を高めている傾向が見られるが、否定的な評価をしている者は、そこに差別的であるという趣旨の批判をしており、さらなる指導上の配慮の必要性がうかがえるのである。

学業成績の変化については資料はない。

## 5 今後の課題

この実践では、学習クラスを少人数にすることによって、生徒一人一人に目が届き、一定の成果をあげることができるであろうとまとめている。

また、習熟度別クラスの固定化の不合理性も論じている。

今後の課題としては、下位ランクに入った生徒の「被差別意識」を払拭し、学習意欲を育てる方途を開発することがあげられた。

## G 高蔵寺高校 (矢野他 1982)

### 1 研究目的

この高校では、学習指導の柱の1つとして、「自求的学習態度の育成」をかかげている。論文の表題にある「学習意欲を加味した評価」は、その柱の実現に向けて、評価の方からアプローチするという意図を示すものである。学習意欲の内、「外存在化された資料」を、平常点として加味する試み等に学校として関心をもっている。

新年度から、固定的習熟度別クラス(バンディング)を導入し、また、あわせて小集団学習の導入も試みた。

なお、この高校では1年を5期に分けた形の指導を行っている。

### 2 研究のデザイン

1, 2年生の1年間のバンディングとセッティングの実践を通して、特に英語科と数学科について、テストによる学業成績に注目した分析を行なう。ただし、テーマに掲げられている「学習意欲を加味した評価」については組織的なデータ収集の配慮はない。

### 3 指導過程

#### (1) 習熟度別グループ編成の仕方

1年生は、オリエンテーション・テストの内、数学科と英語科の成績を基準にグルーピングされた。ただし、数学の学力を「主眼と」している。

8クラス中2クラスを上位クラスとした。

2年生は、「私文(私立大学文化系志望か)」、「国文(国立大学文化系志望か)」、「国理(国立大学理科系志望か)」の3類型のカリキュラム・グルーピングが先ず行われる(ただし、一般的にみて、「私文」の学力が他の2コースに対して低い可能性は大きく、能力別グルーピングの意味も実際には持っていると考えられる)。「国文」、「国理」は、数学科(英語科を加味)の成績で習熟度別3段階の固定クラスを設定。英語科については、リーダーの3時間を除く時間で(時間数の記述無し)「私文」2クラスを3分割、「国

理」の習熟度下位クラス1クラスを2分割した、少人数のセッティングを行った。また、数学科では「国理」の下位クラス1クラスをを2コースに分けて指導した。

固定クラスという表現が用いられていることから、明記はないがグループの編成替えは行われなかったと推測される。

## (2) 習熟度別学習指導の過程

1, 2年生, 英語科の指導過程についての記述はない。

1年生数学科では, 進度は全クラス同一, テストも同じ内容のものを実施した。指導過程については記述はない。

グルーピング以外での指導の工夫としては, 1期から4期までの定期考査終了後, 成績不振の者には黙想, 講話を含んだオリエンテーションに続く, 約1週間, 1日2時間の指導を行っている。ただし, 毎回の指導人数は全体の $\frac{1}{4}$ ~ $\frac{1}{3}$ と減る傾向は見られず, 論文中でもその効果が見られないという言及が, 改善の課題の指摘と共になされている。

## 4 効果の検討

生徒への質問紙調査は, 1, 2年生の英語科, 数学科共に実施していない。

学業成績の変化を検討するために, 1年生英語科では4期分の定期テストの結果が示されたが, 上位グループが, 一貫して他のグループに比べて高い点数を示すこと以外は特に意味のある結果はみられない。ただ, 上位グループの中に1期からすでに成績の低迷している生徒がいたという記述があり, グルーピングの妥当性への問題をうかがわせた。

2年生英語科では, 学業成績についての分析は行っていない。

1年生数学科は, 定期考査ではやや下位クラスが上位クラスに追いつく傾向を示したが, 実力テストでは差が小さくなる傾向はなく, クラス間での変化を示すデータは見られない。

2年生の数学科でも各種のテスト結果が示されているが習熟度クラス間の成績が開いたり, 縮んだりする一貫した傾向性は認められなかった。これは, 下位クラスでの少人数教育の効果も認められなかったということである。

## 5 今後の課題

1年生英語科の実践での問題点は次の様に整理されている。

- ・オリエンテーション・テストの妥当性の向上。
- ・習熟度別クラス編成後の習熟度別指導のあり方の検討。
- ・上位クラス独自の達成度の検討。
- ・各クラスの特徴と傾向に対応した教授法。

2年生英語科の実践では、プラスの効果への言及はなされず、残された問題の整理のみなされた。

習熟下位クラスでは、

- ・劣等感を持ち、学習意欲を失う者が出てくる。
- ・少人数のため、緊張感がなくなりがち。
- ・競争心が育ちにくく諦めてしまう。
- ・進度を上位と同じにしたため、内容に無理があった。

習熟上位クラスでは、

- ・優越感を持つ。下位クラスとの差が大きいため、競争意識は薄い。
- ・クラス内が均質であるため、活気がなくなりがちである。たがいに牽制し合って素直な質問等ができない者が出てくる。

なお、この学校では、前年度まで英語科ではスタディ方式（セッティング）のみを行っていたのを止め、バンディングを基本としたものに変更している。その理由は

- ・考査のたび毎の入れ替えが煩雑である。
- ・生徒が落ち着かない。
- ・下位に安住する傾向が見られ、入れ替えの意味がなくなってきた。

## H 名古屋大学教育学部附属高校（鈴木 1983）

### 1 研究目的

学級内能力別グループ編成によって、生徒の能力をある程度伸ばせるか、それともある程度の能力固定化が進むかどうかを調べる。

なお、習熟度の捉え方をうかがわせる表現として、ここでは「能力別」という用語が用いられている。定期試験の点数が基準となっている。

## 2 研究のデザイン

2年生の化学の授業において、学級内を、1学期の中間テストまでは出席番号順のグループ、それ以降は能力別グループ(試験のたび毎に編成替えをする。また、成績下位の者から順に教卓に近いところにすわらせた)に組む。3学期は仲良し同士のグループ編成。以上の経験に対して、3月上旬にアンケートを行なう。また、成績の変化も検討する。2クラスにグルーピングを実施し、1クラスにはそれを行わなかった。

## 3 指導過程

### (1) 習熟度別グループ編成の仕方

男女2名ずつの4人グループ。編成替え、座席位置については先に紹介した。

### (2) 習熟度別学習指導の過程

記述なし。特に、能力別グループの活用の仕方は考察のポイントとなりそうであるが、やはり言及がない。グルーピング以外での指導の工夫についても記述なし。

## 4 効果の検討

### (1) 生徒への質問紙調査結果

・席の決め方でもっとも好きなものは「好きな子と自由に座る」(76%)、一方、学習に専念できたものは「成績順」(46%)への回答が最も多かった。

・成績の低いグループのため前の席に座らされた者は、「はずかしかった」(はい：28% いいえ：72%)、「今度は頑張ろうと思った」(はい：81% いいえ：19%)、「授業に緊張感が出た」(はい：33% いいえ：67%)と答えた。一方、成績の高かった者は「優越感を感じた」(はい：7% いいえ：93%)、「学習に励みが出てきた」(はい：39% いいえ：61%)といった回答をした。

・どんなグルーピングがよいかという点では、「同じくらいの能力の者同士」(18%)、「よくできる人が1人位はいる形」(40%)、「仲良しグループ」(33%)、N.A. (10%)という結果であった。

### (2) 学業成績の変化

学業成績については適切な数量化が行われていず、資料は不十分である。ただ、定期試験の結果では、グルーピングをとり入れたクラスの方が



そうでないクラスに比べて成績が上昇するということにはなかった。また、成績の個人差が2学期から広がる傾向を見せたが、それはグルーピングの効果か、教材の変化（困難度が増す）や受験に関わる生徒の学習態度の変化等の要因によるものかは分からない。

## 5 今後の課題

習熟度別学習指導に関わる事柄については記述なし。

### 1 名古屋大学教育学部附属高校（山本 1986）

#### 1 研究目的

英語科について、例年に比べて学力差の大きい2年生に、2つのグループに分けてのセッティングによる習熟度別学習指導を実施し、それに対する生徒の反応、教師の反省をまとめる。

#### 2 研究のデザイン

2年生の、週5時間の英語科授業の内、英語IIをテキストとしている3時間（R）で習熟度別学習指導を行ない、英語IICをテキストとしている授業（CG）2時間は通常のホームルーム単位の指導をした。

後者の条件を入れたのは、生徒間の劣等感や優越感の増幅に基づく人間関係の摩擦を避けるため、ホームルームの連帯が弱まらない様にし、時間割編成の複雑さを避けるためであった。

Rの授業は、上位クラス2つと下位クラス1つに分け、3名の教師が担当した。通年で実施した。

#### 3 指導過程

##### （1）習熟度別グループ編成の仕方

上位クラス2クラス、92名と、下位クラス1クラス、38名に分けた。上位クラス間には学力差はない。上位と下位とは、学期毎にクラス替えをした。クラス編成の基準については言及がない。

##### （2）習熟度別学習指導の過程

下位クラスは上位クラスに比べて、その進度が半分以下である。論文中の記述から、進度の遅速以外は、上位クラスでは発展的な内容が多く含まれ、下位クラスでは既習事項の復習も含めた基礎の重視が多く含まれている様に解釈できた。

CGの授業では、英語に関する興味関心を掘り起こすと共に、基本的な事項の定着を目的とした授業が進められた。

#### 4 効果の検討

3学期末に実施した質問紙調査の中から主な結果を選び、表4に示した。表からは、習熟度別学習指導の経験以前と以後との間の、特に下位グループにおける、プラスの方向への変化が指摘できる。また、学力下位の者は、従来型の授業では、その内容について行ける者が極めて少ないのに対し、習熟度別学習指導によった場合、ついて行けたとする者が多いことも興味深い結果であった。

学業成績の変化についてはそれを検討する資料が示されなかった。

#### 5 今後の課題

上位クラスは学力差が大きく、授業内容について行けなかった者が多く出た。内容上の工夫が必要である。下位クラスは、人数が少なかったことに加え、担当した教師が、中学から4年間持ち上がりということもあり、適切な指導ができたこと等が、生徒にポジティブな結果をもたらした重要な要因と考察された。

残された検討課題としてあげられた事項の内、習熟度別学習指導に関わるものとしては次の3点がある。

- ・習熟度別クラスのクラス替えの方法。

表4 習熟度別学習指導に対する生徒の感想 (名古屋大学附属高校 1986)

質問項目		選択肢	上位クラス	下位クラス
習熟度別	授業の内容についてゆけたか	ついてゆけた	22	45
		どちらでもない	40	41
		ついてゆけなかった	38	14
(R)	習熟度別を行なう前は、それに対してどう感じていたか	よい	35	26
		どちらでもない	44	28
		いや	21	46
従来型(CG)	授業の内容についてゆけたか	よい	42	50
		どちらでもない	38	32
		いや	20	18
従来型(CG)	授業の内容についてゆけたか	ついてゆけた	34	3
		どちらでもない	43	37
		ついてゆけなかった	24	60

(%)

- ・習熟度別指導を受けた生徒への評価方法。
- ・2年から習熟度別指導を導入したことによる学力面の効果。

## J 名古屋南高校（塚本他 1985, 出井他 1985）

### 1 研究目的

新設校1年目の試みである。「上位者をさらに伸ばし、下位者を引き上げるために、習熟度別学級編成にした」。クラスは固定方式（バンディング）。塚本他では、生徒の意見調査、出井他では学業成績面の報告をしている。

### 2 研究のデザイン

1年生を対象とした通年の習熟度別学習指導に関する実践報告である。バンディングのため、基本的には総ての教科を習熟度別クラスで行なう。教科は数学科と英語科。

### 3 指導過程

#### （1）習熟度別グループ編成の仕方

1学年8クラスを、「上位クラス(A)」2、「平等に編成したクラス(B)」6に分けた。

編成の基準は、英語科、数学科、国語科の、入試成績と、内申書の成績を用いた。年度内に編成替えを行ったという記述はない。クラス人数はBを特に減らすということもない(被調査者数より推定)。

#### （2）習熟度別学習指導の過程

使用したテキスト、評価(の方法)は、両クラスとも共通。進度は教科によって多少異なるが、ほぼ同一。指導過程における習熟度別クラス間の差異等の記述はない。なお、個々の教科の得意不得意に応じた指導の方途として、ここでは早朝補習を、また、特に、Bクラスについてはテスト成績に基づくセッティングを行っている。

### 4 効果の検討

#### （1）生徒への質問紙調査結果

年度末、2月にAクラス2クラス(91名)と、Bクラスの内2クラス(92名)を対象に調査をした。習熟度別学習指導に直接関係のある項目、「授業の進度」、「内容の困難度」の内、後者のデータ(集計に不整合のある項目は除く)を表5に示した。

表5 学習内容の困難度の認知の結果

(名古屋南高校 1985)

教科	クラス	選 択 肢				
		難しすぎる	半分位分る	自分の学力に合っている	易しい	易しすぎて物足りない
英語(文法)	A	14.3	58.2	24.2	2.2	1.1
	B	10.9	60.9	26.1	2.2	0.0
数 学	A	29.7	39.6	28.6	2.2	0.0
	B	22.8	51.1	23.9	2.2	0.0
現代国語	A	35.2	44.0	19.8	1.1	0.0
	B	8.7	51.1	38.0	2.2	0.0

(%)

この結果によれば、英語科、数学科では両クラスの結果は類似しているが、現代国語ではAクラスの方が困難度が高く認知されている。教科による差がここに見られるのである。なお、その他の項目で、学習の仕方を質問したが、総じて、Bクラスの方が相対的に望ましいというやや意外な結果であった。

## (2) 学業成績の変化

ここでは、グルーピングの妥当性の検討資料としてテスト成績(特に数学科の成績に重点を置いて)の分析を行っている。

上位クラスに所属する者で、テスト成績が学年中の50番以内であった者の割合は、9回のテストで、平均46%であった。即ち、Bクラスの者が半数を越えて50番以内に入っているのである。成績の分布ではAクラスの方が上であるが、単一の教科についてみれば、10段階評価の1, 2, 3に相当する者もAクラスに数名はいるのである。

英語科の成績と数学科の成績とをクロスさせた分析では、8回のテストで、両教科共に50番以内に入った者は平均で11.0人に過ぎず、各教科通じて高い成績をとる者は多くないことが示された。数学科と英語科の成績

の相関係数は、0.2 前後であり、数学科と国語科では0.1 前後であった。

数学科に限らず、バンディングを行なう場合には、個々の科目でのクラス内個人差が比較的大きくなるという問題点が明らかに示されたのである。

## 5 今後の課題

今後の課題としては、上位クラスを「伸ばしきる」方法の考案と、Bクラスに応じた分かりやすい指導の工夫、研究が必要と述べられている。また、意見調査から、クラス固定の習熟度別学級編成は、クラス全体の雰囲気、学習環境に左右されるところが大きい、といったまとめの言及もある。

## K 名古屋南高校 (杉江他 1986, 黒川他 1986)

### 1 研究目的

クラス編成時における習熟度と、数学科での学習到達度との関連について分析する。また、英語科についても、習熟度別の指導成果の検討をする。

習熟度別学習指導のタイプはバンディングである。

なお、前年度の研究では、固定的習熟度別クラスの問題点が指摘されているが、それに応じた改善を図るという研究意図は含まれていない。

ただし、科目毎のグルーピング(セッティング)と、固定的グルーピング(バンディング)との違いを、ここでは、前者は「習熟度の幅に対応するため」、  
「学力が平均以下の生徒層に重点がおかれている」とし、後者は「進学面での実践を高めるため、進学実践の低下や伸び悩みに対応するため」、  
「学力の高い生徒層に重点がおかれている」としている。

### 2 研究のデザイン

1年生と2年生、それぞれについてバンディングのもとでの学習の効果と問題点を、数学科と英語科(1年生のみ)の1年間の実践について、学業成績と生徒の意見の2側面から検討する。

### 3 指導過程

#### (1) 習熟度別グループ編成の仕方

1年生は、年度当初の英語科オリエンテーションテストの結果でクラス分けをする。数学科の成績については考慮しない。9クラス中2クラスを上位クラスとした。クラスの成員数については記述はない。

2年生は、理科系3クラスと文化系5クラスの2グループにカリキュラム・グルーピングがなされ、それぞれから1クラスずつが上位クラスとされた。基準は、国語科、社会科、理科、数学科、英語科の総合点を用いた。

4月当初の数学実力テストでは、上位クラスの平均点は37.7、普通クラスは24.6と上位クラスが高い。ただし、上位クラスでも、10点台が5人(10.9%)、20点台が7人(15.2%)と、その分散は大きいものであった。

## (2) 習熟度別学習指導の過程

1年生の数学科については、指導の内容に関する言及はない。英語科の成績を基準としながら、数学科でも内容の異なる指導をしたのかどうか、核心となる前提条件の記述が不備な点は残念である。

1年生英語科では、「上位」、「普通」の両クラスの進度は同じになるようにした。しかし、同一の内容では、学習に遅速が出るため、上位クラスでは、単語量を増し、長文問題を利用して、内容把握をよりスムーズにできる様に慣れさせ、文法事項も参考書を使ってより深いところまで学習させるという方針で指導した。

2年生数学科では、上位クラスに対しては、「基礎的、基本的事項の定着は各自の家庭学習に任せ、応用力の育成を主眼にした指導を心がけていく」。クラス内の分散の大きさから、普通クラスと「同様の指導も同時に行っていく」。普通クラスでは、「授業においてできる限り基礎的、基本的事項の定着が図れる様に配慮していく。これで補いきれない部分を家庭学習に任せる。未到達の者については何らかの治療を施していく」。以上の様な方針をもって指導にあたった。

グルーピング以外での指導の工夫としては、到達度が不十分な者に対して、基礎、基本事項のチェックテストを繰り返し行った。この試みは、教師に対しても、指導のための情報として活用された。

## 4 効果の検討

### (1) 生徒への質問紙調査結果

1年生では数学授業の理解度を調査している。多少上位クラスで理解度が高いという結果が出たが、指導過程の情報が全くないため、解釈はできない。なお、1年生英語科、2年生数学科では資料はない。

### (2) 学業成績の変化

1年生の数学科では、成績上位者の数を上位クラスと普通クラスとで比較している。11月迄の5回のテストでは、両条件間で差が開くとか狭まるとかいう傾向はうかがえない。上位110番以内に入った生徒は、425名中延べ244名であった。即ち、上位クラスを設定したにも関わらず、成績変動は非常に大きいものであったのである。

1年生、英語科では、両コースのテスト問題が異なるため、単純な比較はできないが、実際には、普通クラスで、上位クラスの者よりも高い得点を取り得る者は、得点分布を見る限り多そうに思われた。また、4回のテスト（期日は不明）について、各クラスの標準偏差を概算してみると、上位クラスのAは、10.2→11.3→14.8→11.4、上位クラスのBは、11.1→18.4→17.6→14.0、普通クラスの内1つは、13.7→18.6→18.6→13.2であった。上位クラスでは、クラス内の成績の分散が大きくなる場合があることをうかがわせる結果である。

2年生でも、習熟度別授業の効果を直接比較できる様な資料は見られなかった。ただ、多様な資料の分析から、普通クラスの成績の分散は相対的に小さく、指導のレベルを決めやすいこと、一方、上位クラスでは、分散が大きく指導がかえって難しいことが示され、グルーピングの基準に大きな問題を投げかけている。

## 5 今後の課題

論文中に書かれている、実践者の今後の課題は、数学科では、基本的には数学の授業そのものの一般的改善論、工夫論であり、習熟度別学習指導を行っていながら、各コースに応じた課題は全く考慮されていない。

英語科では、成績の落ちた者への配慮の必要性、勉強の雰囲気を持った学級作りの必要性が指摘されている。

ここでは、バンディングの問題点が極めて明確に出ているのであるから、そこに課題を絞るべきであったと考えられる。

## L 名古屋南高校（鈴木他 1987, 宮田他 1987）

### 1 研究目的

バンディングによる指導について、1年生の学習実態調査と成績の検討、2年生の学力変化の検討を、英語科、数学科を中心に行なう。

なお、この高校は、学力面では愛知県下では中の下に属するという記述があったことを付記する。

## 2 研究のデザイン

1, 2年生への、バンディング・タイプの習熟度別学習指導の、年間にわたる実践を行なう。年間の諸テストの結果を分析の資料とする。生徒への質問紙調査は行わない。

## 3 指導過程

### (1) 習熟度別グループ編成の仕方

1年生は、中学校からの調査書を参考にしながら、主としてオリエンテーション・テストの英語の成績でグルーピングをした。2年生については記述がない。また、人数に関する配慮への言及もなかった。

### (2) 習熟度別学習指導の過程

1年生英語では、グラマーとリーダーに分かれているが、前者では両コース同一の内容を教えた。後者では、上位クラスは進度は変えず、副教材を加えて、普通クラスの1.5倍程度の教材量をこなした。

数学については、1, 2年生共に指導過程の記述はない。

グルーピング以外での指導の工夫として、ここでは、数学科、英語科、国語科で、補習を中心とした、補充指導を行っている。夏休みの前後、2学期からは早朝補習等を、希望者を原則に行った。早朝補習では、能力別グルーピングも導入している。

## 4 効果の検討

### (1) 生徒への質問紙調査結果

今回は習熟度そのものに関する質問は行わず、学習実態を調査している。学校全体として(習熟度別の集計はない)、数学の家庭学習時間の不足が特徴的なポイントとして指摘された。

### (2) 学業成績の変化

1年生英語科では、上位クラスにおいて、「英語の学力が生徒の血となり、肉となったとは必ずしもいえない様に思える」とまとめられている。反省点として、教師の計画が試行錯誤的であったこと、進度が早過ぎたことがあげられている。上位クラスの問題点は、数値にも現れている。定期考査の段階評定で、1学期は10段階の生徒が上位クラスで25人、普通ク



ラスで8人であったものが、2学期には上位クラス12人、普通クラス15人となり、段階が5以下の者の数は、1学期上位クラスで6人から、2学期18人に増加をみたのである。

1年生は、6教科9科目の合計点でも英語科単独と同様の集計をしている。それによれば、オリエンテーション・テストでは、上位2クラス94人中57人が100番以内に入っているのに対して、9月の実力テストでは、34人に減っている。

さらに、業者による模擬試験の結果も資料として示されている。結果は表6に示す。ここでは、上位クラス及び、学校全体の成績で、7月から11月にかけて、英語科と総合点で相対的低下の傾向が認められるのである。論文ではこれを、「生徒の学習意欲の減退ぶりが顕著である」と考察している。

表6 業者テストによる全国平均との差 (名古屋南高校 1987)

		上位クラス		全校	全国
		A	B		
英語科	7月	40.1	38.9	30.5	37.1
	11月	33.5	32.6	23.3	35.3
数学科	7月	32.3	32.1	29.0	41.2
	11月	29.0	28.2	25.6	37.2
総合	7月	124.1	120.9	105.4	125.9
	11月	98.4	96.4	79.7	112.0

(粗点の平均値)

なお、特に、上位クラスと普通クラスとの間の差が開くという傾向は認められなかった。

1年生、2年生の数学科の成績は、愛知県内の他の高校との比較による問題点の分析が中心に行われた。習熟度別学習指導に関わる資料としては、上位クラスと普通クラスとの差の拡大の有無を見ようとするものがあつたが、データを見る限り、それを明らかに示す結果はなかった。

## 5 今後の課題

グルーピングの基準の妥当性については1、2年生の事例共に極めて問題が大きいことがさまざまなデータより明らかである。

研究の構えとして、「賛否は別にして、それを既成の事実と受けとめて論

をすすめることにする」と、宮田他の論文で真っ先に述べられている。

これは、習熟度別学習指導そのものは変えず、その枠の中における相対的な改善のみを図ることをいっているのであろう。これまでのこの高校での研究では、習熟度別学習指導そのものの検討に踏み込んだものはなく、受験のためには上位者を鍛える方法が必要であり、それは習熟度別学習指導しかないという、極めて狭い枠組みにとらわれたものといえるのではない。1985年からの研究成果が実践の改善に反映されている様子はいかがえない。

また習熟度に応じたカリキュラム上の工夫を「斥けた」理由の主なもの、「複雑さ」、「不穏当さ」にあるという結論、さらに重要な改善のポイントは評価方法、それも順位づけの機能のみに限った方法を、いかに「不都合な面が生じ」ることなくできるかに集中していること等、基本的な問題を抱えた実践研究であると考えられるのである。

## M 南陽高校(南陽高校数学科 1986)

### 1 研究目的

「学習到達度の低い生徒の学習条件を、本人自身の学習意欲という点からも、少人数という学習環境からも、また、教師側の指導の工夫という点からも良くすることによって、まず底上げをし。ひいては全体の学習効果を上げようとする」ために、数学科でセッティングを行なう。

### 2 研究のデザイン

2年生、均質クラス(文脈から、集団間等質、集団内異質の意味と考えられる)から、少数の学習到達度の低い生徒を抽出し、彼らだけのクラスを編成し指導する(実質的に1クラス増となる)。学期毎に編成替えをし、出入りした生徒の特徴を考察し、生徒の意識調査も行なう。

教科は数学、「基礎解析」4単位分。「代数・幾何」3単位分は習熟度別学習指導を行わない。

### 3 指導過程

#### (1) 習熟度別グループ編成の仕方

1学期は1年生の数学の全テストの合計点、2、3学期は、その前の学期の「基礎解析」のテストの合計点で、3クラス139人中、下から20人程

度を低習熟度のクラスに該当する者とした。該当者にはこのコースの趣旨を説明し、両親にもそこに入って学ぶかどうかを相談する様に指導した。生徒に「拒否権」を認めたのである（この年度は、23名中拒否は0名）。

編成替えは学期毎に行なう。3クラス139人中、低習熟度クラスを経験した者は50名であった。

## （2）習熟度別学習指導の過程

教科書の新しい事項については、低習熟度クラスでは「整理に重点を置きながら、概念を例を用いて相互的に比較しながら指導している」。ただ、それは教師の意識の問題であって、「実際面では（他のクラスと）大差はない様である」。また、例題や問題を解く場合の指導も「大差ない」。

一方、副教材の扱いでは、低習熟度クラスでは宿題の指示とノートの点検を中心として、他のクラスに比べてきめ細かい指導をしている。生徒の作業量も多い。「厳しいがめんどろ見のよい講座」として進められる。

なお、教材、進度、テスト、評価は親クラスと共通とした。

なお、グルーピング以外での指導の工夫については特に言及はない。

## 4 効果の検討

### （1）生徒への質問紙調査結果

1学期末に習熟度別指導に関する質問紙調査を行なった。低習熟度クラスの生徒は基礎解析の時間に対して、4月と7月の時点で、「嫌だった」（4月：70% 7月：14%）、「何とも感じない」（4月：16% 7月：77%）、「待ち遠しかった」（4月：14% 7月：9%）と回答した。否定的な意見は減少している。

その他の主な結果については、低習熟度の生徒の所属する親クラスの生徒と比較して、表7に示した。そこでは、授業の理解度の点で習熟度別クラスの方により好ましい結果が見られる。少人数という条件に対するポジティブな結果も見られる。

### （2）学業成績の変化

1学期に低習熟度クラスに在籍し、3学期までに親クラスにもどった、即ち、成績が下位でなくなった者は、23名中9名であった。また、2学期に新たに低習熟度クラスに移った19名は総て3学期には親クラスにもどっている。

表7 習熟度別学習指導に対する生徒の感想

(南陽高校 1986)

質問項目	選 択 肢	低習熟度	親クラス
		ク ラ ス	
授業がわかるか	わ か る	43	16
	どちらともいえない	52	48
	わ か ら な い	4	36
習熟度別指導を成績下位者に実施していることについて	下 位 者 で よ い	57	19
	どちらともいえない	30	65
	上 位 者 が よ い	13	16
少人数クラスについてどう思うか	よ い	74	37
	どちらともいえない	26	58
	よ く な い	0	4

(%)

表8 テスト結果に基づく低学力者への習熟度別指導の効果

(南陽高校 1986)

	親 ク ラ ス			習熟度別 ク ラ ス
	A	B	C	
1年生時(前の学年)での成績	67.3	64.8	69.3	44.8
「代数・幾何」(習熟度別ではない領域)の中間考査の成績	72.3	68.7	51.8	46.2
「基礎解析」(習熟度別をしている領域)の中間考査の成績	48.8	47.4	44.2	48.8

(%)

親クラスと低習熟度クラスのテスト結果の比較も興味深い。表8に、3つのテストの結果を比較して示した。この結果からは、低習熟度の指導をした条件での伸びが比較的大きく現れている。

また、学年最終時に成績不良のための落第者を、この領域では1人も出さなかったという点も、学業面の効果として指摘できよう。

## 5 今後の課題

この論文では、成績上位の者への指導という問題を今後の課題として掲げている。

なお、ここでの成果は、指導過程の記述が不十分であるので、不明な点が多いが、与えられた資料の限りで推測すれば、少人数教育を行ったところに最大の原因がある様に思われる。また、論文で言及されている様に、指導者に「当該学年に責任を持つ中心的な教員を配置できた」ことも大き

な要因であった様に思われる。

## N 日進高校（牧他 1987）

### 1 研究目的

生徒各々の学力に合った授業をねらいとして、英語科で3年生に対して習熟度別学習指導（セッティング）を新たに導入する。

### 2 研究のデザイン

3年生、英語科授業の内、週3時間の実践の効果を生徒への質問紙調査によって検討する。

### 3 指導過程

#### （1）習熟度別グループ編成の仕方

9クラスの内、3クラスを上位クラス、6クラスを均等（下位）クラスとした。基準は2年時の英語科の評定。なお、ここでは、カリキュラム・グルーピングも行われている。上位クラスでも、理系の者は他の上位クラスよりも成績がよい。クラスの人数は、均等である。

#### （2）習熟度別学習指導の過程

上位クラスと下位クラスでは、7割程度を共通した内容とした。

上位クラスでは、授業の進度を早め、教科書以外の教材も使用し、教科書の内容も応用的な事柄に触れながら指導した。下位クラスでは、教科書のみを教材とし、説明をゆっくり、丁寧にし、練習も繰り返し行い、基礎的事項に返ることを心がけた。

テストの内容は、共通の部分から選ぶ。

教師の配置は、特定の教師が特定のレベルの者を教えるという配置にはなっていない。

### 4 効果の検討

生徒への質問紙調査結果は数値では示されなかった。

習熟度別学習指導については、授業の進度について、「ちょうどよい」という回答がほとんどであったと述べられている。授業の進め方については、下位クラスで、説明をよりゆっくり、丁寧にしてほしい、分かりやすくして欲しいという希望が多く見られたと述べられている。

学業成績の変化については資料はない。

## 5 今後の課題

授業の内容、展開の工夫というところで課題が残る旨の記述があった。生徒の実態把握も加えて、予めの準備上の不十分さが指摘されよう。

### ○ 日進西高校 (矢満田他 1985)

#### 1 研究目的

入学当初小さかった英語の学力差も1年生時の学習指導の中で大きくなってきた。「学力のついてきた生徒は、さらに大きく伸ばし、学力の劣る生徒は、少しでも力をつけさせる」ための試みとして、習熟度別学習指導を行い、その成果を検討する。

#### 2 研究のデザイン

8クラスの内、4クラスに習熟度別学習指導(英語科のセッティング)を行い、残り4クラスはそれを行わない。この両条件の学業成績の追跡を行なう。なお、ここではあわせて理系、文系のカリキュラム・グルーピングも行っている。

#### 3 指導過程

##### (1) 習熟度別グループ編成の仕方

習熟度は上位と下位の2水準を設定。上位クラス、下位クラスで人数は同じである。クラス分けの基準については言及されていない。

##### (2) 習熟度別学習指導の過程

記述なし。また、グルーピング以外での指導の工夫についても記述なし。

#### 4 効果の検討

生徒への質問紙調査は行われなかった。

学業成績の変化については、4月から12月までに実施された6回のテスト結果がグラフで示されている。正確な数値そのものは概算しか分からないが、全体的に、習熟度別学習指導を行っていないクラスに比べて、行っている条件の方が、学力の低い者についてはわずかに伸びが大きい傾向を見ることができる。論文では、成績上位の者も同様の傾向が見られるとしているが、データを見る限り、その結論は誤りである様に思われる。上位の者については特に差は見られない。習熟度別学習指導での上位と下位の間差が開くか否かについてはデータからは明かではなかった。ま

た、論文では、習熟度別学習指導の条件では各々で成績の両極化が起きている様に書かれているが、その傾向も十分には認められない。

## 5 今後の課題

上位クラス、下位クラス、それぞれにおける成績不振者への対応の開発の必要性を論じている。

## P 岡崎西高校（伊藤他 1986）

### 1 研究目的

この高校では、生徒の数学の学力差が大きいという認識が先ずある。この研究は、実態に対応する方策として、習熟度別学習指導を導入し、その効果を検討しようとしたものと推測される。

### 2 研究のデザイン

2年生の文系（カリキュラム・グルーピングを導入していると思われる）5クラスの基礎解析の授業（時間数不明）について習熟度別学習指導（セッティング）を行なう。生徒への質問紙調査、1、2学期の考査といった資料で効果を検討する。

### 3 指導過程

#### （1）習熟度別グループ編成の仕方

定期考査の成績をもとに、上クラス2、下クラス3に分けた。編成替えは学期毎に行う。

#### （2）習熟度別学習指導の過程

記述なし。

### 4 効果の検討

#### （1）生徒への質問紙調査結果

質問紙調査の結果は、クラス別で示された。グラフのみで数値の記入がないため、概要しか分からない。

当該クラスに入ることに「劣等感を感じるか」という項目では、下クラスの15%から20%が感じると答えている。習熟度別学習指導は「効果がある」という回答は、上クラスでは30%、55%見られたのに対し、下クラスでは25%、20%、10%とその割合が低く、上クラスでは全くみられなかった「逆効果」という回答が、5%から25%見られた。授業の内容は

「難しい」が、上グループでは15%、20%であったのに対し、下クラスでは30%から50%見られた。総じて、下クラスで、問題のうかがえる結果が多く見られ、指導上の改善点があることを推測させた。

## (2) 学業成績の変化

成績は、1、2学期の4回の定期考査の結果を折れ線グラフにした資料で示された。それによると、上2クラスの内、1クラスは一貫して他のクラスより高い平均値を維持したが、もう1クラスは、2学期に至り、下クラスと類似の結果を示すところまで落ち込んだ。このクラスは、質問紙で、「効果がある」という評価がもう一方のクラスより25%ほど低く、授業の進み方が「速い」と感じる者が30%いた(もう一方のクラスは5%)。担当教師の配置が示されていないが、指導者の差があるかも知れない。また、学級集団の様相も関わりを持つ結果であろう。

## 5 今後の課題

この論文では、習熟度別学習指導の問題点として、次の事項をあげている。

- ・教室移動のため、授業開始時に落ち着かない。
- ・2水準のクラス内でやる気のある者、ない者に分かれ、授業を進めにくい。
- ・受験に数学を必要としない生徒が消極的になる。
- ・定期考査の問題を共通にすると、問題のレベルが下がる。

さらに、習熟度別学習指導に実施にあたっては、「時期、生徒の質、生徒集団の性質」を考慮する必要があること、指導の難しいクラスはベテラン教師があたるべきことがあげられている。

## Q 岡崎西高校(鈴木他 1986)

### 1 研究目的

古文の場合、「古文の基本的文法事項の習得」に目標を絞って習熟度別学習指導(セッティング)を行い、学力不足の生徒の力を引き上げることができれば、それ以後の授業で文法に振り回されない展開ができる、というねらいのもとに実施した実践報告。



## 2 研究のデザイン

2年生に対し、古文の基本的文法事項(用語、敬語、助動詞、助詞)を一通り習熟させるために、1学期間習熟度別学習指導を実施する。生徒の意識調査、学力の変化について検討を加える。

## 3 指導過程

### (1) 習熟度別グループ編成の仕方

クラスは、上位と中位の2水準を設定。5クラスの内3クラスをまとまりにして、上位1、中位2、残り2クラスから、上位1、中位1のクラス編成をした。人数は上位、中位で変えない。

クラス分けは、1年生時の最後に実施した古文文法テストの結果による。

### (2) 習熟度別学習指導の過程

上位クラスは、基本的文法事項がほぼ習得されていることを前提に、平常の授業展開をする。中位クラスは、上位クラスの半分の教材を扱い、残りの時間を文法の指導にあてた。

## 4 効果の検討

### (1) 生徒への質問紙調査結果

1学期の期末考査後に質問紙調査を実施した。優越感、劣等感を感じたかについては、上位の88%、中位の83%が「何とも思わない」と回答している。この方式が「よかった」とする回答は上位23%、中位55%、一方「よくなかった」とする回答は、上位で25%、中位で6%であった。その他の項目も含めて、習熟度別学習指導への評価は、中位では相当高い傾向が見られた。

なお、生徒間の差別感の問題については、ここで少ない傾向が見られたことから、「学力伸長を目的にはっきりした形で区別されても、そのこと自体によって差別意識をさらに強めることはない。下位の生徒にとっては、差別されることよりも、自分達の学力にあった、よりわかりやすく、学力の伸長する可能性のある授業の方を選ぶのである。」という記述が見られた。

### (2) 学業成績の変化

1学期末に、1年生の末に実施したと同一の文法テストを実施したとこ

ろ、70点満点の者が、上位クラスは27.0から35.7に、中位クラスは12.7から21.8に上昇した。ただ、中位クラスに依然0点に近い低得点の者がいるという問題も残った。

## 5 今後の課題

各習熟度に応じた到達度の評価をすべきであるのにできなかったという課題が指摘された。

## R 瀬戸高校(滝川他 1983)

### 1 研究目的

1980年度より実施している数学科での習熟度別学習指導の3年間の実践のまとめをし、次年度以降の方針を立てる。習熟度をどう捉えるかについては、言及がない。

なお、この高校は、愛知県下では中の下位に属しているという記述がある。

### 2 研究のデザイン

習熟度別学習指導は、1, 2年生数学科に限ったセッティングである。また、2年生ではカリキュラム・グルーピングが導入されている。1982年度の各種の統一テスト成績、1~3年生それぞれの1年生当初からの生徒への質問紙調査による追跡調査を資料としてその効果を検討した。

### 3 指導過程

#### (1) 習熟度別グループ編成の仕方

1年生は、2学期から、8クラスを上級2クラス、中級4クラス、初級2クラスに分けた。基準は1学期の数学総合成績。2学期の成績により、3学期にクラス間の若干の入れ替えがなされた。

2年生は、理系3クラスのみで、1学期から3段階のグルーピングを行っている。1学期、2学期の成績で、クラスの入替わりが若干ある。

クラスの人気は、1年生では初級グループが上級より10名ほど少ないが、2年生ではその様な差はなかった。低学力で少人数教育を、というねらいを持つという言及は特にはなかった。

#### (2) 習熟度別学習指導の過程

指導過程、指導内容に関する記述はない。

#### 4 効果の検討

##### （1）生徒への質問紙調査結果

生徒への質問紙調査は、1980年から1982年まで継続して行っている。各年度間の結果の傾向は、大きくは変わらないので、1982年度に限って主なデータを表9に示してみよう（なお、データは数値ではなく、ヒストグラムで示されているため、筆者が読みとり、数値に換算した。従って、合計は100%となっていないし、実際の数値とは一定の誤差があることは断っておく）。

表9 習熟度別学級編成に対する生徒の意識 （瀬戸高校 1983）

項 目	選 択 肢	上 級	中 級	初 級
数学の授業を習熟度別学級編成にしたことについて	良 い	15	33	59
	どちらともいえない	25	40	25
	良 く な い	57	24	15
習熟度別学級編成が自分の学力向上に役立ったと思うか	役 立 っ た	4	20	50
	どちらともいえない	29	43	35
	役立ったとは思わない	65	36	15

（%）

この結果では、初級クラスではポジティブな、一方上級クラスではネガティブな、対照的な結果がみられる。クラス替えの希望についても同様の結果がみられている。また、1980年度から1982年度の2年間の変化を見たデータも示されたが、生徒の意見に大きな変化は見いだされない。教科担任の教師の印象では、上級クラスで、女子の反発が強いと報告されている。

##### （2）学業成績の変化

1年生の学業面の変化は、2学期以降実施された5つのテストの得点分布で示された。平均値、標準偏差値が算出されていないため、的確な検討はできないが、分布を見ると、すでに10月の期末考査から各々のクラス内に大きなバラ付きが生じている。3学期での移動も、360人中、初級から上級へ3人、中級へ11人、中級から上級へ20人、初級へ15人、上級から中級へ23人、初級へは0人見られたのである。

なお、ここでは、1学期の成績ではなく、当初のオリエンテーション・テストでクラス分けをした場合の仮想的な分析を試みているが、その妥当

性は1学期の成績よりさらに低いと解釈できる様な結果であった。

2年生の学業成績の変化は、1学期と2学期の成績評価の段階別分布によって検討された。これも、学期が進むとバラつきが大きくなるという傾向を見た。なお、1年生時のグルーピングをそのまま続けたらという仮想的な分析を加えているが、やはり、学習に近い時点でのグルーピング基準の方（ここでは1年生学年末評価）が妥当性は高いことをうかがわせる結果も報告されている。

教師の総括では、上級クラスは、一部に学習意欲がなく成績を下げた者がいたこと、一方、中級クラスから上がってきた者が学習意欲を盛り上げたことがあげられている。中級クラスは、生徒間の刺激も少なく、学習意欲が低調である状況も一部見られるとまとめられている。初級クラスでは、学習意欲が盛り上がらないが、一部の生徒は良く努力して成績を向上させた、しかし、その場限りで終る者も少なくない、とまとめられている。

## 5 今後の課題

- ・習熟度別クラス内でも差があり、ことに、初級での指導が難しい。また、初級の生徒にやる気を起こさせる方途を探る必要がある。
- ・上位者への指導の改善（進度を速める）が必要。
- ・クラス分けを成績のみで行ったことが学習意欲の低下を招いた。
- ・教師の交替が生徒を落ち着かなくさせたり、教師も生徒の把握をしにくい。
- ・成績処理等の事務が非常に煩雑になる。
- ・生徒の意欲が高くなければ効果が薄い。
- ・クラス編成の基準の妥当性を考える必要がある。

こういった現状を踏まえ、この高校では、次年度から、1年生は1学期の数学科総合成績と生徒の希望を入れての上級クラス2クラスの設定をするという方針を立てた。この2クラスは増設であり、ここにはいない者は通常のクラスで学ぶ。2年生は上級、初級各1クラスのみ、生徒の希望も入れて設定するという方針を立てた。

## S 瀬戸窯業高校（山本 1986）

### 1 研究目的

商業科では、「計算事務」については、生徒の計算能力にすでに大きな差があるため、習熟度別学習指導を取り入れている学校が多い。「簿記会計」は、高校に入って初めて学習する科目であるが、ここでは、2年時から習熟度別学習指導を導入した。その理由は、

- ・簿記の基礎の所で理解できない生徒が見られ、「簿記会計 I」の学習到達度の生徒間格差は、他の商業科科目より広がった。
- ・理解度の遅い生徒に個別指導をするために、1クラスを2班編成とし、遅進クラスは少人数で構成する必要がある。
- ・「簿記会計 II」で検定に対する生徒の目標がそれぞれ異なるため、（それに応じた）効果的な検定指導の必要性がある。

この論文では、習熟度別クラス編成の現状、導入後の成果を報告すると共に、今後の課題について述べる。

### 2 研究のデザイン

2年次より、「簿記会計」で2段階の習熟度別学習指導を行なう。明記されていないが、この科目のみのセッティングと推測できる。学業成績は検定の合格率によって検討し、さらに、生徒の意見調査も行った。

### 3 指導過程

#### （1）習熟度別グループ編成の仕方

促進クラスと、遅進クラスの2段階が設定された。その基準は2つ。

- ・「簿記会計 I」の到達目標ラインに達しているか。
- ・学習意欲があるか。

学習のレベルがボーダーラインにある者は、学習意欲を考慮した。ただし、授業後の補習等を考えた。人数は、3：1を基準とした（この年度は、促進クラス33名2クラス、遅進クラス12名2クラス）。編成替えは言及がない。

#### （2）習熟度別学習指導の過程

促進クラスの指導目標は、「簿記会計 I」の学習をもとに、取引についての記帳能力をさらに高めると共に、企業会計に関する、基礎的理論を理解させ、株式会社における財務諸表を作成し、分析する能力を養う、所に置

かれた。

遅進クラスの指導目標は、商品売買業における基本的な取引の記帳に習熟させ、特殊な取引の記帳を通して記帳能力を高めると共に、企業会計の基礎的理論を理解させること、に置いた。

指導内容については、年間の計画が、配当時間も含めて、両クラス用のものが示された。量、学習順序、学習事項について、明らかに異なる内容となっている。

また、促進クラスでは、全商検定1級(会計)受験のための準備学習の時間を確保し、反復練習を行った。

遅進クラスでは、簿記の基本事項の反復練習の徹底を図り、個別指導を重視する指導過程をとった。

グルーピング以外での指導の工夫については記述がなかった。

#### 4 効果の検討

##### (1) 生徒への質問紙調査結果

2年生90名を対象に質問紙調査を行った(促進、遅進、両クラスの人数は記述無し)。

習熟度別学習指導は役に立ったかという質問に対し、「役にたった」(促進クラス：11%、遅進クラス：67%)、「あまり役に立たなかった」(促進：41%、遅進：0%)、残りは「どちらでもない」という回答であった。遅進クラスでは、ポジティブな回答が多いが、その理由としては、「授業進度が適していた」(25%)、「丁寧な指導」(75%)、「少人数クラス編成」(50%)、「成績が向上した」(25%)があげられた。促進クラスでのネガティブな回答をした者の理由は、「進度が速い」(83%)、「成績の低下、伸び悩み」(41%)、「促進クラス内での劣等感」(21%)であった。論文中では、促進クラス内での劣等感の生起について注目した論及がなされた。

##### (2) 学業成績の変化

学業成績については、検定合格率で検討された。1981年度からの検定合格者の推移を表10に示す。表中1984年度からが習熟度別学習指導の実施年度である。

これによれば、明らかに、習熟度別学習指導導入後の検定合格率に上昇が見られる。

表10 検定合格者の割合

（瀬戸窯業高校 1986）

	1981 年 度	1982 年 度	1983 年 度	1984 年 度	1985 年 度		
					3年生	2年生	1年生
全商1級（会計）	2	13	11	36	48	51	—
全商2級	20	72	34	67	95	93	76

（％）

## 5 今後の課題

この学校での実践から生まれた、指導上のメリットは次の様にまとめられている。

- ・遅進クラスにおいて個別指導が可能となった。それにより効果を高めることができた。

- ・能力別に指導目標を立てることができた。

- ・クラス毎に検定の目標を設定したため、検定指導を効果的に行えた。

今後の課題としては、次の諸点があげられている。

- ・生徒へのアンケートでは、習熟度別クラスを3段階にしてほしいという意見が、現状維持、習熟度別廃止とそれぞれ同数みられる。3段階編成は、施設面、指導者の負担増、指導目標の設定上の困難等から、実現は不可能である。

- ・評価の内容を、促進クラスと遅進クラスとで別々にしていることからくる、ことに促進クラスからの不満の問題。ただ、統一問題を実施すればよいというものではない。

- ・8%の生徒が、年度途中のクラス替えを希望しているが、カリキュラムの違い、評価内容の違い、編成基準の曖昧さから、その実施は困難である。

なお、論文には言及がないが、遅進クラスの設定には、クラス数の増加があるのではないか、その結果としての教員の配置の問題は生じなかったのか、という疑問が残っている。

## T 豊明高校（石田他 1981）

### 1 研究目的

1年時の英語科学力差に応ずるための方法として、2年時からセッティ

ングによる習熟度別学習指導を導入することが効果的であろうと考えた。この年度は導入初年度である。

さらに、この実践を踏まえて、習熟度別編成の理想的形態をも考察する。

なお、習熟度の捉え方としては、「『集団の中における個人差に応じた指導』すなわち『習熟度別学習指導』」という表現がある

## 2 研究のデザイン

2年生、英語科(リーダーを除く文法・作文の3時間で実施)、8クラス中6クラスにおける習熟度別学習指導の実践研究。学力の変化を検討するために定期テスト、実力テスト、校外模試等の成績を資料とし、また、生徒に意識調査を実施する。なお、この高校では、2年時より3類型(私文・就職、国公立文系、理系・国公立文系)のカリキュラム・グルーピングを導入している。

## 3 指導過程

### (1) 習熟度別グループ編成の仕方

英語の成績により、3段階に分ける。各クラスの人数は45人。各期(4期制)の成績により、每期クラス編成替えをする。

### (2) 習熟度別学習指導の過程

全クラス同じ教材を使用する(ただし、レベルに応じて、補助教材を使用する等する)。また、進度を合わせ、クラス替え後の困難を除く。定期テストは、原則として同一問題とする。そして授業の始めには各々のレベルに合った「5分間テスト」を実施した。

なお、グルーピング以外での指導の工夫として、1年時には中学英語の総復習を行い、中学英語から高校英語への橋渡しをしている。ただし、学力差を小さくすることには成功していない。

教師は、上と下のレベルを経験のある教師が受持ち、中のレベルは経験の少ない教師が受け持った。

## 4 効果の検討

### (1) 生徒への質問紙調査結果

生徒に対して、質問紙調査を行っている。実施時期については書かれていない。主な結果を表11に示す。これによれば、下位クラスでの理解度で好ましい結果がみられる。クラス替えの評価は、上位クラスに比べて、下



表11 習熟度別学習指導に対する生徒の感想（豊明高校 1981）

項 目	選 択 肢	ク ラ ス		
		上	中	下
理 解 度	わ か る	6.4	30.0	37.7
	変 ら な い	79.2	47.1	60.4
	わ か ら な い	14.3	22.9	1.9
クラス替えへの評価	よ か っ た	50.7	57.9	71.4
	ま ず か っ た	49.3	42.1	28.6
満 足 度	た め に な っ た	83.6	60.8	82.7
	た め に な ら な い	16.9	39.2	17.3

（％）

位クラスで、移動可能性を高く評価していることが明らかに示されている。

下位クラスではそれが励みになっており、一方上位、中位クラスでは恐れになっていたと考察されている。満足度では、中位クラスで明らかに低い結果が示されている。この理由については考察はなされていない。

## （2）学業成績の変化

まず、X校との2校合同テストについての検討がなされる。英語科の成績では、1978年は2.8点、1979年は5.9点X校の平均値が高かった。しかし、1980年では豊明高校が6.0点高い点数を示し、その成績の伸びをうかがわせた。ちなみに、1980年も、国語、数学ではX校に同じかやや低い点数であった。また、英語テストの成績上位者44人中、4人が下レベルの経験者であったことは興味深い。

次に、全国規模の対外模試の結果では、この高校の進歩をうかがわせる結果を見ることができなかった。ただし、この結果は、前者に比べて、物差しのスケールが大きく、小さな変化については、それを示すことのできないものでなかったかという評価がむしろ妥当と考えられるのである。

## 5 今後の課題

クラス編成替えで、移動は少なくなかった。クラスを一度も移動しなかった者は、上で19.8%、下で9.7%、中では2.8%に過ぎず、指導者、学習者双方に戸惑いがあった。また、ボーダーラインの者に対応した指導ができるかという問題がある。

評価の方法も課題として残っている。各レベル毎の内容にした場合、上

位の者に不利が生じるという形の問題点があげられている。

## U 豊明高校 (伊藤他 1982)

### 1 研究目的

数量化 III 類を用いて、生徒の学習態度を調査し、学力等と態度との関連性を検討することを目的とした研究である。ただし、ここでは、資料中に習熟度別学習指導(セッティング)による、2年生、英語科、文法・作文 2 単位分の学習結果としての 2 つのテストの得点分布が示されており、これについての分析にとどめる。

### 2 研究のデザイン

1 年度 4 期の内、1 期、2 期のテストの結果を比較する。

### 3 指導過程

#### (1) 習熟度別グループ編成の仕方

上位と下位の 2 水準にクラスを分ける。7 クラスを、上位 3 クラス、下位 4 クラスに分ける。每期クラスの編成替えを行なう。人数については言及なし。

#### (2) 習熟度別学習指導の過程

指導過程、指導内容に関しては記述なし。

### 4 効果の検討

資料は学業成績の変化の側面のみに限られる。

上位クラスと下位クラスの 1 期と 2 期のテスト成績の平均値と標準偏差の結果を表 12 に示す。1 期に比べて、2 期は困難度がかなり高くなっている。しかし、特徴的なのは、上位クラスの標準偏差が極めて大きくなっている点である。レンジも、1 期は、上位が 97 から 61、下位が 69 から 14 であったのに対して、2 期は、上位が 93 から 6、下位が 68 から 0 となっている。下位クラスで上位クラスの平均値を上回った者は 7 人 (3.9%)、一方、上位クラスで下位クラスの平均点を下回った者は 13 人 (9.6%) いた。

表12 上位クラス、下位クラスの成績(平均値)の変化  
(豊明高校 1982)

	上位クラス	下位クラス
1 期 成 績	78.2 ( 9.3)	47.0 (14.7)
2 期 成 績	45.7 (18.6)	22.7 (13.1)

( ) 内SD

## 5 今後の課題

論文中では特にはあげられていない。

## V 豊田工業高校（山口他 1982）

### 1 研究目的

機械科の科目の中では、「機械設計」は理解度に差の生じやすい科目である。この科目で習熟度別学習指導を実施した実践報告を行なう。

### 2 研究のデザイン

2, 3年生の「機械設計」, 2年生はその内「材料力学・工業力学」2単位分を習熟度別学習指導で行なう。3年生は時間配当の記述なし。

### 3 指導過程

#### (1) 習熟度別グループ編成の仕方

2年生は、1クラスを上下2水準に分割した。基準は1学期は1年生時の設計の評点をもとにした。2学期以降は記述はない。人数は、1学期は上45人、下36人、2学期は上26人、下55人、3学期は上27人、下54人であった（この数は合計であり、指導はこの半数を1クラスとして行われた）。2学期から上の人数を少なくしたのは、1学期の上の成員の成績に幅があり過ぎたためであった。

3年生は、上下2水準の、人数同数のクラスを作った。1学期は2学年の総合成績、2学期は1学期の成績でクラス分けをした。3学期は編成替えをしなかった。

#### (2) 習熟度別学習指導の過程

2年生は、上クラスでは、基本的事項の学習後、ワークブックによる演習を、程度の高いものまでとり組ませる。問題の家庭学習の指示も行なう。下クラスでは、アナライザーを使って個々の生徒の理解度に留意した授業を行った。理解度の低い者には授業後に補充指導を行った。

3年生は、上クラスの生徒は多くが技術系に進むことを考慮し、将来の設計製図の仕事に十分対応できる様に、教科書の内容は早く扱い、関連した内容の応用分野への発展にも触れた。下クラスでは教科書の基礎的な学習に終始した。

#### 4 効果の検討

2, 3年生それぞれに同一内容の質問紙調査が行われた。習熟度別学習指導について、「よい」は3年生40.0%, 2年生24.1%, 「よくない」は3年生20.0%, 2年生21.5%, 残りはどちらでもないという回答であった。授業が分かりやすくなったかという点では、「分かりやすくなった」が3年生30.7%, 2年生11.4%, 「分かりにくくなった」は3年生で24.0%, 2年生で26.6%であった。劣等感, 差別感を感じるかについては、「感じる」が3年生で13.3%, 2年生12.6%見られるという結果であった。

学業成績の変化は2年生については, 考察可能な資料が示されなかった。

#### 5 今後の課題

2学期以降のクラス人数配分の変更は, 生徒の学力の実態に応じたグルーピングと指導の組立の必要性を示す資料であったといえよう。

3年生で2学期から考査の内容を上, 下で変えたため, 下のクラスの者も良い成績がとれる様になり, 自信の形成に役立つ様に感じられ, これは習熟度別学習指導のメリットだろうという言及があった。

(続く)

#### 文 献

- 天野郁夫・耳塚寛明・樋口大二郎・菊池栄治・酒井 朗 1986 高等学校における学習習熟度別学級編成に関する研究 東京大学教育学部紀要, 26, 27-58.
- 出井 博・鈴木公樹・永治典久 1985 英語・数学とその他の教科との相関: 英語・数学による習熟度編成の場合 名古屋南高校紀要, 1, 55-60.
- 古池仁一・滝上良一・今村博樹・深谷秀男・竹内泰平・杉浦 清 1985 類型別・習熟度別の数学到達目標及び評価法 知多東高校紀要, 2, 101-122.
- 飯田敬一・藤原 薫・磯野朝男・加治屋哲・蜷川喜信・吉見元孝・与田三喜男・森 茂・杉浦雅則 1982 習熟度別学級編成の実践と研究 東浦高校紀要, 4, 1-17.
- 飯田敬一・田中謙一・仲森正敏・竹本淳一・吉見元孝・中村立実・坂 和彦 1984 学習に関するアンケート調査 東浦高校紀要, 5, 1-15.
- 伊佐治 浩 1984 英語I習熟度別授業: 57・58年度の実践から 愛知高校紀要, 15, 58-65.
- 石田誠二・宇佐見親史・沼田 誠・佐藤寿洲・伊藤香枝子・筒井光雄・江坂栄子・加古立身・兼松 忍・大場きしえ 1981 英語の効果的学習指導法の研

- 究：習熟度別学習指導の実践 豊明高校紀要, 5, 131-140.
- 伊藤勝輝・牧野宗夫・田中忠樹・川角尚登・兼松 忍・久野保彰・山本芳敬・宮本守康 1982 学力と学校適応度の相互間連に関する研究：多様化する高校生に対応する学習指導法への科学的アプローチ 豊明高校紀要, 6, 3-88.
- 伊藤真澄・加藤邦雄・岡本 勤・高野のり子・畔柳守良・高橋健一・太田芳男 1986 習熟度別指導について 岡崎西高校紀要, 1, 86-87.
- 黒川正章・宇佐見親史・塚本潤二・小川貴義・亀井桂司 1986 英語の効果的指導法の研究：習熟度別学級編成を通して 名古屋南高校紀要, 2, 95-102.
- 牧 貞夫・伊藤英治・梅下裕子・野田三甫子・寺西徹能・藤田達成・小木曾隆・永田徳子・稲垣久徳・坂美由紀・深谷泰司 1987 習熟度別クラス編成の実施について 日進高校紀要, 9, 37-40.
- 宮田方史・小川貴義・田口直人・海野まゆみ・宇佐見親史 1987 1年性習熟度クラスの学力向上をめざして：その成績の動向と今後のために 名古屋南高校紀要, 3, 149-162.
- 南陽高校数学科 1986 II 類型(理系) 数学习熟度別スタディー実施のまとめ 南陽高校紀要, 6, 73-90.
- 杉江慎市・鈴木公樹・出井 博・永治典久・林 秀樹・小島正嗣・渡辺一弘 1986 クラス編成時における習熟度とその後の学習到達度：数学学習到達度の測定を通して 名古屋南高校紀要, 2, 75-84.
- 杉江修治 1989 中学校における習熟度別学習指導の事例 中京大学教養論叢, 30-2, 231-266.
- 杉江修治・宇田 光 1989 能力を基準とした集団編成が教科学習に及ぼす効果：Yehezkel Dar と Nura Resh のレビューに基づく検討 中京大学教養論叢, 29-4, 113-160.
- 鈴木健治・近藤泰雄・鈴木かおる 1986 古文における習熟度別授業 岡崎西高校紀要, 1, 75-78.
- 鈴木公樹・杉江慎市・出井 博・木村 豊・林 秀樹・永治典久・小島正嗣・渡辺一弘・加藤憲治 1987 クラス編成時における習熟度とその後の学習到達度 II 名古屋南高校紀要, 3, 115-122.
- 鈴木 孝 1983 学習過程における座席の問題：特別教室における能力別グループ学習と席について(II) 名古屋大学教育学部附属高校紀要, 28, 93-98.
- 滝上良一・古池仁一・深谷秀男 数学の習熟度別授業展開に関する考察：生徒のアンケート結果と3回のテストのデータから 知多東高校紀要, 1, 48-55.
- 滝川清信・浅見和男・清水義行・藪田勝和・山本 泉・福田 稔・安藤嘉成 1983 数学科習熟度別授業の経過報告と3年間のまとめ 瀬戸高校紀要, 10, 79-111.
- 豊田 勤 1981 習熟度別編成指導の諸問題：本校数学科での実践から 東山工業高校紀要, 9, 19-23.

- 塚本潤二・酒井 明・糸井 仁・楠 雅史 1985 習熟度に応じた学習指導と実践報告 名古屋南高校紀要, 1, 3-10.
- 矢満田直人・山下恵子・河瀬嘉江・中野重之・本田洋子・高橋左紀子・坪井秀生・亀川美恵子 1985 一人ひとりの学力を伸ばす英語指導について: 習熟度別学習の実践と成果 日進西高校紀要, 2, 98-100.
- 山口 哲・小笠原鋭男・古橋邦男・橋本 寛 1982 機械設計の効果的指導: 習熟度別学習 豊田工業高校紀要, 1, 57-62.
- 山本岩男 1986 高校2年次における習熟度別英語指導の試み 名古屋大学教育学部附属高校紀要, 31, 97-102.
- 山本雄司 1986 「簿記会計II」における習熟度別クラス編成の効果的指導について 瀬戸窯業高校紀要, 16, 90-109.
- 矢野幸一・山本真樹・中村喜代広・橋詰文雄・前田直樹・石川祐三・岡嶋憲治・堀部和経・大内田 昇 1982 習熟度別学習において学習意欲を加味した評価に関する実践的研究 高蔵寺高校紀要, 2, 1-17.